

解放者よ、再び

甘党

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロック・リエーブル

解放者で最後の八人の中で唯一命を落とした者として語り注がれていた。

最年少ながら未来が見ることができ、魔法に関しては神代魔法を持っていないにも関わらず最後の8人と呼ばれている少年は次の世界では科学に特化していた地球という世界で普通の学生として生活をしているとすると見慣れた魔法陣が飛び出していて

ヒロインは次第追加していきます。書籍版や零、短編集のネタにも触れていくつもりです。

# 目次

最後の別れ	1
転生し	5
今することは	12
全ての人々のこれからが自由な意志の下 にあらんことを	19
たった一人で	28
世界を変えるための旅へ	39
緑の大坑道	45
地下での遭遇	57
奈落での日常	66
奈落の少女	71
V S サソリ	82



# 最後の別れ

「……悪い。どうやら僕はここまでだな。」

誰もがもはやボロボロだった。神々との戦で僕たちはもはや敗北を喫し今は撤退戦を行っている途中だった。

「……どういう事だい?」

「いや。殿を務めようかなって思ってたな。僕の魔法も神代魔法の一つじゃないし。こりや、一人が犠牲にならないと無理だ。生憎僕の魔法は今の時間ではかなり有効だ。最後のあがきくらいはできるだろ。」

「ちよつと待つて。それつて。」

「僕が犠牲になるよ。伝えるべき知識も言葉もオスカーに伝えてある。……最後にあがいてくる。神々の使徒つて奴からな。」

少し寂しそうに笑う僕は神々との争いの最後の犠牲者となろうとしていた

「そんな。ダメだよ。ロック。」

「リーダー分かつているんだろ? 神の目的は僕だ。この体質だよ。だから僕がいなくなればその分神はしばらくの間は行動できなくなる。まあ僕はここまでだろうけど。」

膨大な魔力を持ち、魔力操作による魔法の無詠唱、さらに回復魔法や結界魔法、さらには錬成など神代魔法以外の全ての魔法を一人で覚えきった僕の体質は神の目的となることは間違えはなかった、

「……本当に行くのか？」

「ええ。オスカー。いや。兄さん。本当にありがとうございます。僕はあなたに拾われなかったらずっとこの世界どころか。オルクスでただの孤児として育ってきた僕を拾ってくれて。」

一言ずつ挨拶をしていく。元々僕は少しの間様々なことを話始める。

このメンバーではオスカー兄さんの次に加入し。そして孤児だったのを拾われた。

たった今は13歳の僕にとってわずかながらの時間であれ。それでも幸せと言えることだった。

解放者のメンバーが。各自最後の挨拶を告げる。ほとんど全員が涙を流している。それだけ僕は愛されていたのだろう。

しかしもはや時間はなかった

神々の使徒が大勢で迫ってきている。

「んじや。お別れですね。……願わくは。未来のために、未来につなぐために。人々が自由という自分の意思で生きられるように。僕はあなたたちに幸せと家族がでまし

た。……未来は変えられる。未来は変わらないといけない。それは僕の目でも写っています。」

未来視。この少年が最初に気づいた魔法だった。

膨大な魔力をもちそして最後の言葉を交わす前一つだけとある未来が見える

「未来はいくつもの可能性があります。そして多くの人が、多くの生命が日々発達しているように。そして未来を描く駆け足になるように。」

「……ロック。」

「それじゃあ最後に僕は名乗ってなかったな。ミレディ姉さんの恩師の名前をとろうか。」

「えっ?」

そして宣言する

「僕の名前はこれからロック・リエーブル。それじゃあ……未来の人々が自分の意思で生きられますように。」

と僕は戦場へかける。そして最後の時を惜しむように。神に抗い始める。

時間稼ぎということをしっかりこなすため闇魔法や結界魔法主体の防御よりの魔法の使い方だ。

アーティファクトも神代魔法を使わずに対抗できる人間は恐らく僕が最初で最後の

人間だろう。

しかしたった一人で前線で支える。

それがこの少年はできた

そして結果的にたった一人で2時間。それも一匹も虫一匹も通さず。

……んじや最後に大きな花火をあげようか。

もはや魔力もそんなに残っていない少年は小さく息を吐きそして最初から魔力をためていた最後の忠誠と呼ばれる体内に埋め込んでいる宝石を解放する

「そっか、僕はまた昔の兄さんたちに会えるんだよな。」

忘れてしまった記憶が蘇る。エリセンであつた少年たちを思い出す。

その中に自分も相手側にいたはずだ

「……未来はきつと変えられる。また来世で今度は帰る立場として僕はあそこに立つ。」

そういうと僕の体が、光が吸い込まれていき。

その瞬間ロック・リエールは消滅した。



# 転生し

月曜日。それは一週間の内で最も憂鬱な始まりの日。きっと大多数の人が、これからの一週間に溜息を吐き、前日までの天国を想ってしまふ。

それは俺も同じことでのいつの間にか17歳になった、石川健斗も同じことだった。俺は二度目の人生を謳歌している。

この世界線では平和で、さらに治安がいいのが特徴だ。

魔法がないが科学と呼ばれる知識さえあれば、ほとんど何でもできる。

生活も車や電車などトータスでは思いも寄らない高速移動の道具や、ゲームや漫画などの娯楽の発達。トータスでは思いもしらないことばかりでかなり興味深いことがあった。

なによりも自分の意思で生活ができておりこの世界では何不自由もなく暮らしている。

「……いい天気だな。」

と教室でのんびりとお茶を飲む。

最近のお気に入りのメーカーのお茶とお菓子を飲む姿がどこかお祖父ちゃんくさい

ものがある

しかし精神年齢は30歳になっているのだ。どこかオヤジくさいことがあるのは当然だろう。

「まったく。そのお爺ちゃんみたいなのやめなさい。」

「ん？ 雫か？」

「ええ。一体何しているのよ。」

「いやゝ温かいお茶を飲みながらの和菓子って美味しくね？」

「…いや。そういうところがお爺ちゃんほいのよ。」

「……雫はいらないの？」

「……いる。」

とまったりとお茶を淹れ始める

冬の初めが近づき体の底からあつたかいお茶を取り出す。

「ふう。」

「……。」

とまったりしている俺と雫。

雫と呼んでいる少女は幼馴染の八重樫雫。ポニーテールの少女で表向きは剣道の流派を持つ全国制覇を何回もしたことがある少女で俺のオカンみたいな人だ。猫好き同

士趣味も合うし

「…美味しいわね。」

「だろ？」

「……雫ちゃん。健くん何しているの？二人ともお弁当は？」

今は昼休憩中でありながらお茶とお菓子で時間を過ごしている白崎香織という俺の親友に当たる少女は苦笑している。

「ん？俺は三限終わりに早弁した。」

「……何しているのよ。」

「いや。だって腹減ったし。」

少し呆れた風になっている雫と苦笑している香織

「あんたって運動はしてないのによく食べるわよね？」

「運動してないってマラソン大会とか参加していて毎朝走っているからな。」

「……陸上部に入らないの？」

「趣味程度だからいいんだよ。あんまりタイムを気にするってよりも楽しんでやるのが俺の流儀だしな。散歩みたいなものだよ。」

「散歩でフルマラソン走りきるバカがどこにいるのよ。それも2時間50分くらいで走るのよ。」

雫は一度苦笑したように見ている。まあ普通ではありえないことだがこの世界でも俺はなぜか魔法を使える。

身体強化の魔法でマラソンを走ることすら生ぬるいのだ。

「てか香織。南雲起きてるぞ。」

「えっ?」

そういうと10秒チャージの栄養補給食を取っている南雲はじめての姿がいる。

最初見たときは驚いたがそれでも南雲のイメージとは違うものだった。

こっそり未来視を発動する。

あのときは白崎香織もいたはずだ。

香織が向こうに行った瞬間未来が見える。しかしあまり明確ではなく、未来が変わることがあるってことだ。

あの時の記憶は鮮明ではない。

どこか靄がかかっているのは確かであるぶん記憶処理の魔法がかかっていたのだろう

「……健斗?」

「ん?」

「どうしたの?体調悪い?」

「お前は俺のおかんか。」

俺が軽く突っ込みを入れるとクラスのほとんどが口を押さえる。

それは南雲や香織も同じようにしていることから全員が思ったことがあるだろう。

「ぶっつわよ。」

「当てられるものならな。」

「……はあ。もういいわ。それでどうなのよ。」

「いや、なんか嫌な予感っていうか、トラブルに巻き込まれるような気がして。」

「……やめてよ。健斗の勘は当たりやすいんだから。」

すると雫が頬を引きつり健斗を見る。実際は未来視で見た未来のことだけに絶対に当たる未来なのだ。

そしてお茶を飲む。

「……てか最近天之河の奴こっち構わないようになったな。その代わり南雲が被害受けているけど。」

「まあ香織が南雲くんに構っているからでしょ?」

まあそうだけど。

天之河は小学校のころから俺とは相性が悪く互いに睨み合っている中だ。

ほとんど完璧と言われる天之河と神童と呼ばれる俺は比べられることが多い。主に恋愛対象として。

なお、全く興味が無いんだけど香織が俺に報告してくるので分かるんだけど。やっぱり天之河の方がモテるらしい。

地味に傷ついているのがまだ子供なんだなと思ってしまっけどモテたいと少し思ってしまうのはダメだろうか。

と俺は明らかにあることに気づく

「……お前最近あいつに辛辣だな。」

「別にいいでしょ？あなたがいうならば『自分の自由な意志の下に』でしょ？」

「……お前俺に毒されすぎすぎじゃね？」

「いいでしょ。……もういっぱいお茶もらえないかしら。」

本当に毒されてきているな。

俺は苦笑しながらもお茶を淹れようとすると

そのときはやってきた。

天之河光輝の足元に純白に光り輝く見覚えのある円環と幾何学模様の魔法陣らしきものを注視する。

その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大

した。

自分の足元まで異常が迫つて来たことで、ようやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた愛子先生が咄嗟に「皆！ 教室から出て！」と叫んだのと、魔法陣の輝きが爆発したようにカツと光つたのは同時だった。

んじゃ久しぶりの故郷に帰るか。

俺は一人だけ落ち着いて意識を魔法陣へと向けたのであった。

## 今することは

光がおさまると目に飛び込んできたのは巨大な壁画だった。縦横十メートルはあり、そうなるその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうつつすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

周囲を見てみると、どうやら自分達は巨大な広間にいるらしい。

素材は大理石で間違いはないだろう。石造りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が彫られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。恐らく神山の大聖堂だ。

本当に戻ってきたんだな。

懐かしさでつい頬が緩んでしまう。

周りには呆然と周囲を見渡すクラスメイト達があった。どうやら、あの時、教室にいた生徒と愛ちゃんは今全員この状況に巻き込まれてしまったようである。

「零。大丈夫か？」

「えっ？ええ。無事だけど。ここは？」

「さあな。」



俺は少し罪悪感を覚えながら雫を誤魔化する。

確実にここはトータスだ。そして俺にとつては久しぶりの故郷に当たる。

法衣集団の中でも特に豪華で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそうなこれまた細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被っている七十代くらいの老人が進み出てきた。恐らく今の教皇だろう。外見によく合う深みのある落ち着いた声音で俺達に話しかけた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

現在、健斗達は場所を移り、十メートル以上ありそうなテーブルが幾つも並んだ大広間に通されていた。

おそらく、晩餐会などをする場所なのではないだろうか。上座に近い方に畑山愛子先生と光輝達四人組と俺が座り、後はその取り巻き順に適当に座っている。健斗は最前線だ。

イシユタルの話を書く限り、……俺たちが解放者であったときからもう数千年以上の時が流れているらしい。

魔族の戦争。そして数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそうだ。戦力は拮抗し大規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが魔物の使役と言われた瞬間俺は少し思い浮かぶものがあつた。

変成魔法で間違いないな。

この魔法の正しい定義は「有機的な物質に干渉する魔法」であり、生物だけではなく植物や食料、人体に対しても行使できることなので今は魔物を作るくらいのことくらいしか使用してないのは本質を理解してないからであろう

魔族がそれを覚えたということは大迷宮の攻略者がいることだ。すなわちそれだけの技能を持った奴がいるってことだろう。

「あなた方を召喚したのは『エヒト様』です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があつたのですよ。あなた方という『救い』を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、『エヒト様』の御意志の下、魔族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

イシユタルはどこか恍惚とした表情を浮かべている。おそらく神託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。

イシユタルによれば人間族の九割以上が創世神エヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。そこら辺は全く変わっていない。

すると俺はクラスメイトの一人がとある異常に気づいたのを気づいていた。

やっぱり面白い奴だなっと思つていたら愛ちゃんは突然立ち上がり猛然と抗議し始める。

「ふざけないで下さい！結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！私達を早く帰して下さい！きつと、ご家族も心配しているはずですよ！あなた達のはしていることはただの誘拐ですよ！」

ぷりぷりと怒る愛ちゃん。百五十センチ程の低身長に童顔、ボブカットの髪を跳ねさせながら、生徒のためにとあくせく走り回る姿はなんとも微笑ましく、そのいつでも一生懸命な姿と大抵空回つてしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒は少なくない。

今回も理不尽な召喚理由に怒り、ウガーと立ち上がったのだ。「ああ、また愛ちゃんが頑張つてる……」と、ほんわかした気持ちでイシユタルに食つてかかる愛子先生を眺め

ていた生徒達だったが、次のイシユタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!」

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そ、そんな……」

いや。恐らく返すつもりはないだろう。あの狂った邪神のことだ。俺たちのことも駒として使っているのだろう。

愛子先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。平穩である方が少ないがそれでも健斗はやることはあるの  
でそれを達成するにはちようどいい機会だった。

「未だパニックが収まらない中、光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音  
にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員の注目が集まったのを確認するとおもむ  
ろに話し始めた。

「皆、ここでもイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもな  
いんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実な  
んだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召  
喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？  
どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですね？　ここに來てから妙に力が漲っている感じがし  
ます」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると  
考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も

救ってみせる!!」

ギユツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

同時に、彼のカリスマは遺憾なく効果を発揮した。絶望の表情だった生徒達が活気と冷静さを取り戻し始めたのだ。光輝を見る目はキラキラと輝いており、まさに希望を見つけたという表情だ。女子生徒の半数以上は熱っぽい視線を送っている。

……まあ今は教会に目を付けられるし本当の帰宅方法については語らない方がいいだろう。

世界を変える。

これは絶対にやらなきゃいけない行為だ。

俺はそのために生まれてきたのであり、まさに天命と呼べるだろう。

いつ動き出すのか。どう動くのか。

それをしっかりと決めると決めるためにただ流されるクラスメイトの様子をただ見ていたのであった。

隣ですつと黙っている雫に気づかずに。

全ての人のこのれからが自由な意志の下にあらんことを

翌日早速訓練と座学が始まった。

まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になるうってのいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオーブン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くな

よ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

俺の兄さんに作れる人がいますと言ったのならどうなるのだろうかと思いつながらそういうえばステータスは見ることがなかったなと思いつたと思いつたステータスを見るするとステータスにはこう書いてあった？

石川健斗 17歳 男 レベル：1

天職：先駆者

筋力：100

体力：100

耐性：100



敏捷：100

魔力：1000000

魔耐：500000

技能：未来視「＋自動発動」「＋仮定未来」「＋天啓視」・暗殺術・錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複製錬成」「＋圧縮錬成」「＋高速錬成」「＋自動錬成」「＋イメージ補強力上昇」「＋消費魔力減少」・全魔法適性・複合魔法・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」「＋効率上昇Ⅴ」「＋魔素吸収」「＋身体強化」「＋部分強化」「＋変換効率上昇Ⅲ」「＋集中強化」・想像構成「＋イメージ補強力上昇」「＋複数同時構成」「＋遅延発動」・天才肌・高速魔力回復・言語理解

天才肌 見た魔法をすぐに使用することができる

数値で見ると恐らく前の記憶の通りかな。恐らく異世界転移もステータスが強化されているし。

てか改めて見ると魔力やばいな。兄さん曰く平均が10だから魔力が数値が異常ではないことがわかる。

よく考えたら同時発動最上級複合魔法打ちっぱなしでも1時間近くは持つからな。

そりゃ確かに膨大な魔力を持っていて神の使徒に一人で対抗できたのはこのステー

タスがバグっていたからだろう。

メルド団長からステータスの説明がされており基本的に知っていることなので適当に聞き流しながら俺は少し思い浮かぶ。

魔力については恐らく前世のものを引き継いでいるのは確定だろう。元々魔法が聞きづらく神代魔法や神々の分解もほとんどダメージがなかった俺だ。これに関しては圧倒的なアドが取れるだろう

そうして他の人がステータスを報告していく。

そして天之河のステータスは

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高

速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

となつている。勇者よりも圧倒的なステータスを見たとやっぱりバグっているんだなあと思つてしまう。

まあステータスは圧倒的有利ということだろう

今まで、規格外のステータスばかり確認してきたメルド団長の表情はホクホクしている。多くの強力無比な戦友の誕生に喜んでるのだろう。

その団長の表情が南雲のステータスプレートを見た時「うん？」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか？」というようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ジツと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」

歯切れ悪く南雲の天職を説明する。へえ、オスカー兄さんと一緒の天職かな。

歯切れ悪く南雲の天職を説明するメルド団長。

その様子に南雲を目の敵にしている男子達が食いつかないはずがない。鍛冶職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。

檜山大介が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？ 鍛冶職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師つて珍しいんっすか？」

「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山が、実にウザイ感じでハジメと肩を組む。見渡せば、周りの生徒達——特に男子はニヤニヤと嗤っている。

「さあ、やってみないと分からないかな」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみるよ。天職がシヨボイ分ステータスは高いんだよなあ？」

錬成。

無詠唱で唱えるとすると檜山の真下に穴が開き檜山その穴に落っこちる。

全員がその檜山をぼかーんと見ている

一応5mくらい開けた穴で檜山のギヤーギヤー言っている声が響く。

「……あの、どうでもいいんで先に進めてください。面倒な奴は消えたので。」

冷たい声が周辺に響きわたる。雫でさえその声が出したのか一瞬分らないくらいの声だったらしい。

「あ、ああ。そういえば君のステータスはまだ見てないな。」

「あつ俺はステータス見せる気ないですよ。戦争も参加する気ないので。」  
するとクラスメイトがキョトンとする。メルド団長や他の団員も固まる。

「どういうことだ?」

「いや根本的に俺教会のこと信用してないんで。出来るだけ技能は黙っていたいんですよ。なんか胡散臭いつーか。どこか狂信者みたいな感じでしたし。」

「ちよつと健斗!!」

するとメルド団長はぎよつと目を見開く。

「あいにく俺は自分の意思で生きたいんで。人に流されて生きるなんて堅苦しいしな。俺は俺のやり方で地球に帰る方法を見つげるから。だいたい目処はついているし。」

「へ?本当ですか!?!」

「ああ。神代魔法が鍵になると思う。昨日遅くまで俺は図書館にこもっていたからな。その中に恐らく空間を転移する物があったからワンチャンそれを複合したら地球に戻れるんじゃないのかって思っている。だからそれを目指す旅をしようかなって思っている。」

すると全員が希望に満ちた目で俺を見る。すなわち家に帰れるというものだ。

まあ、本当は神代魔法を全部集めてある魔法を手に入れないといけないのだが。

「…………?」

すると雫がこつちをじつと見ている。……なんとなく話を逸らさないとやばそうな気がする。

そしてそれ一人のクラスメイトによって解消された。

「まさか、この世界の人達がどうなってもいいっていいのか!？」

すると天之河がそんなことを言い出す。

「いや当たり前だろう。ぶつちやけい迷惑なんだよ。いちいち教会の言うことを聞く理由なんてないだろ?人の意思は自由だ。続けることや頼ること与えられる事に慣れちやいけないんだよ。掴み取る為に足掻いて、自分の意思で決めて、自分の足で進む。それが一番後悔をしなくてもいいやり方だ。自由の意思のもとでこそ幸せは掴めるんだ。」

「えっ?」

そして一言告げる。久しぶりの言葉だ。俺の意思で。そして前世で解放者が祈っていた言葉

「全ての人々のこれからが自由な意志の下にあらんことを。」

その一言がメルド団長や愛ちゃんやキョトンとしている。

年下のはずなのに、どこか説得力のある言葉。

どこか大人びた様子にクラスメイトも愛ちゃんも言葉を失う。

「まあ、そういうことなので俺は近日迷宮が解明されているオルクスの大迷宮にこもるので。戦争やりたい奴だけやれば。俺は参加しないけどな。」

と手をひらひらさせてそう告げる。その言葉に反論できる人はいなかった。

## たった一人で

あれから一週間がたち、和人は旅の準備を進めていた。

俺は戦争に参加しないことを決めているので近いうちに王宮から出ることになる。

なのでしばらくは路銀を集めながら旅に出ることにしたのだ。

しかしメルド団長曰く一ヶ月は待つてほしいとのこと

それは始めの目的地が俺がオルクスの大迷宮であることだったからだ。どうやら最初の訓練は一週間後、オルクスの大迷宮であるらしく一緒に参加してほしいとのことだった。

恐らく大迷宮の場所は7つ

あった場所から考えると

オルクス

ライセン大溪谷

グリユーエン大火山

メルジーネ海底遺跡

氷雪洞窟



ハルツィナ樹海

神山

だろう。

ついでにいうならばオルクス大迷宮が最高難易度で全ての迷宮を攻略した時にだけ攻略対象つてことは知っている。

オルクスの大迷宮は俺が地図を見る限り、昔孤児ですりをしていた緑の大坑道で間違いないだろう。

俺が昔入り込んで教会を相手に孤児と一緒に戦っていた場所。

解放者と名乗る前の話で盗賊として俺は教会と争っていた。

そこからさらに迷宮を作ったはずだ。

……つまりダンジョンは100層以上は間違えはないだろう。

怒らせた時のオスカー兄さんは鬼畜以外言葉がないのでかなり難易度は高めだろう

……しかし最高到達点が65層か。なんか既視感があるな。

あれはミレディ姉さんとオスカー兄さんと出会った場所だ。

……ロック・リエールという人生はそこから始まった。

「……」

ダメだ。思い出すと涙が出てくる。

正直今の人生も俺にとつては悪くはないし恵まれていると感じる。家族仲もいいし、友達も、親友だっている。

それでも、あの7人だけは俺にとつて特別だった。

たった数年。それだけの歴史でそれだけ重かった数年だ。一人になつたな。

これがここまで心細い物であるとは知らなかった

会いたいなあ。

会いたいよ。兄さん。姉さん。

その言葉は誰にも届かず絶対に絶対に叶うこともない。

それでも願わずにはいられない。

どんだけ苦しくても、どれだけ厳しくても

僕の全てはそこにある

……あの時からもう、どれくらいたったのであろう。

千年？いやもう万年単位で変化しているのかもしれない。

……それでも、願わくは

俺が全てを終わらせたい

死んでもいい。未来につなぐためならば

たとえ親しい仲を殺すことになってもいい。兄さん、姉さんの願いならば。

俺は石川健斗であってロック・リエールであるのだから。

この世界の歪さを俺の全てをもって終わらせる。

そう決意したところでコンコンとノックの音が聞こえる

どうやら来客らしい。一応魔力を持ち準備する。

俺が反教会派であることは誰もが知っていることだ、なので王国や教会から刺客を送られてもおかしくはない。

「はいどうぞ。」

俺が答えるとするとういうわけか見覚えがある人が入ってくる。

金髪のいかにも王室育ちの豪華な衣装に包まれていた

「……………へ？」

「こんにちわ。健斗さん。少しお時間はありますか？つてどうしたんですか？」

この国のお姫様であるリリアーナ姫が急に尋ねてきた。これにはさすがの俺も固まってしまう。

すると驚いたのはリリアーナ姫も同じだったのか俺の方を指差す

「なんで泣いているんですか？」

「えっ？あつ。」

「そういえば泣いていたのを思い出す。」

「……えつと。まあ、いろいろあつてな。」

「適当に誤魔化す。まさか故人を思っていたとは知らないだろう。」

「詮索してはいけないと気づいたのだからリリアーナ姫は少し間を空ける。」

「そういえばリリアーナ姫は何のようだ?」

「ちよつと秘密のお話があります。」

「護衛もなくか?」

「はい。そつち側の方が健斗さんにとつてよろしいかと。」

「……なんかよくわからんけどいいか。」

「部屋の中に入ったリリアーナに紅茶もどきを入れそして俺は反対側の席に着く。」

「んでなんの用だ?話したいことがあるらしいけど。」

「……」

「するとリリイは一息つきそして」

「健斗さんはこの世界に来たことがありますね?」

「……」

「私は変装してステータスプレートを見た時に一緒にいました。その時健斗さんは図書館に行ったと言いましたよね?でもそれはおかしいです。私たちは施設の案内をして」

なかったはずで。さらに目撃証言もない。ステータスの開示もしていないあなたがなぜ図書館に行けたのか。この世界の歴史の本を実際健斗さんの部屋からは見つかりました。貸し出しもちゃんと記録されて。それも深夜に。警備の穴はなかったはずで。即ちあなたはその時点で技能や魔法を使ったことになりません。」

おつとこのメツセージに気づくとはさすがだな。正直変装も気づいていた俺は驚くことはしなかった。

「んで。」

「しかし、健斗さんの借りてきた本には神代魔法も、オルクスに大迷宮があることも分かっていなかったことです。私もその本は読んだことがありましたから。でも、あなたは、神代魔法のこともオルクスの大迷宮があることを知っていた。」

「正解。俺はもともとオルクスの大迷宮も全てのことを知っている。まあ数千年前の歴史だけだな。」

隠す気がないので俺はそう告げる。元々この世界の真実に近づける事実近づけるだろう。

「……数千年前ですか？」

「ああ。俺はいわゆる転生人。すなわち生まれ変わりだよ。数千年前の世界ではロック・リエーブルとして名乗っていたな。」

「ロック・リエーブルですか？」

「ああ。知らないと思うぞ。てかこの世界では恐らく悪役として知られていると思うし。」

「…どういことですか？」

「俺は昔解放者。教会からは反逆者と呼ばれる組織に入っていた。」  
するとリリアーナ姫の顔が固まる。

反逆者。神代に、神に反逆し世界を滅ぼそうと画策した八人の眷属がいたと伝わっている。しかし、その目論見は破られ、彼等は世界の果てに逃走した。そして一人が神から仲間を助けるために自殺した。多くの神の眷属を巻き込んで。

その果てに現在の七大迷宮といわれている物を残したらしい。この「オルクス大迷宮」もその一つで、奈落の底の最深部には反逆者の住まう場所があるとされているらしい。まあ恐らく事実だろう。

そして一言目を告げる。

「この世界は歪だと思わないか？」

「えっ？」

「だっておかしいだろ？俺たちを呼び出したのだって、急に竜人族や吸血鬼族が今まで共存していたのに数百年前きっぱり滅ぼされているんだぞ。……たった一言の神託だ

けで。」

「っ!!」

リリアーナの顔が固まる。それは一言だけで異常に気づいたらしい。

やっぱりリリアーナはできる方の人間だ。頭を使いどうしてそうなるのかも理解できるのだろう

「てかこの王国だつてそうだ。王国という名前なのに結局は教皇が実権を握っている。結果的に神託の一言だけで国や他の国すらも動かせる。他の国だつてそうだ。普通戦闘経験のないものたちを勇者と讃えるか？人一人殺したことのないただの学生がだぞ。」

「……」

「言つとくけど天之河を勇者にするならば人族は多分負けるぞ。あいつには覚悟がたりない。誰を救い、誰かを見捨てる。その取捨選択ができていないんだ。それなのに勇者をあいつにしているんだ。戦争に死者はつきものだ。それが分かっていないんだよ。」

冷酷な声。それでも事実だろう。

「言つとくけど俺ならばちゃんとした兵士を使い精鋭として送らせた方がいいと思うけどな。人を殺すつてことはそれなりの覚悟がなければできないだろうし。」

「健斗さんはどうしてそう言い切れるのですか？」

「魔人族が神代魔法の獲得をしている可能性が。いや確実に神代魔法である変成魔法の獲得に成功しているからな。」

「えっ?」

ほぼ確実に変成魔法の獲得に成功していると聞きリリアーナの顔が強張る。

それもそのはず。神代魔法は神すら対抗できる魔法として有名なのだ。その神代魔法を覚えたとなるとほぼ確実に人族は敗戦するだろう。

「大迷宮の攻略者が出たんだろうな。恐らくこれから魔人族は大迷宮攻略を確実に視野に入れ始めるだろう。そして人族を滅ぼすつもりだ。迷宮の攻略にこの世界の真実と神代魔法を残すことを俺たちは決めた。決戦に負け、それでも未来に望みを託すためにな。」

「……その神代魔法は魔物を使役することは」

「使役じゃなく生物を作り変えることが可能だ。本質を辿れば吸血鬼族や竜人族、魔人族の元になったと考えられる魔法だからな。だから正確には作った、もしくは作り変えた魔物だと思った方がいい。確かあそのコンセプトは自分との戦いだし、あんまり神とは関係ないからこそ恐らく攻略できたのだろうな。」

実際攻略者はいえることは確実だ。

そして信仰に心を奪われていないこともほぼ確実。



後は運命の選択を待つだけか

「まあ、この情報をどうするのかも俺の存在を教会に話してもいい。まあ、それが普通だ。お前から見たら俺は異端者だ。」

「へ？話してもいいんですか？」

「当たり前だろ。お前の意思を尊重するだけだ。俺は俺の人生だしお前はまず一国のお姫様だろうが。それも王国のな。」

呆気にとられるリリアーナ。一つ苦笑しそして答える

「王国のお姫様なんだから国民を守るのは当たり前のことだろ？もし俺が危害が与える」と判断したなら俺を売ればいい。」

「……あつ。」

「今日は逃げないけど明日出発するよ。この世界の常識の変化もわかったしな。教会から目を付けられているし俺は早々にこの国から出た方がいいし。」

少し早いけどそれでももう決めたことだ。

とりあえず雫たちをこの世界から返すことが条件だ。

何を捨て、何を守るかは既に決まっている。

俺が大切な人は雫と香織。

その二人は絶対に日本に返さないとな。

そんなことを考えながら俺は荷造りを再開した。  
未だ椅子で座っているリリアーナ姫を放置しながら。

## 世界を変えるための旅へ

翌日朝早くに外に出た。

誰にも伝えずそれは実行する。

結局リリアーナ姫は俺の情報を話さなかったらしい。

まあそれはいいとしてせっかくの旅日和だからな

置き手紙を残し健斗は大量に詰めた食料と衣服を持ち次の町へ行こうとしていた

……まあ、錬成を元にして稼げばいいか。

恐らく俺は近いうちに異端者として張り出されるだろう。そうしても別に構わない。

俺は既に神と戦う準備はできている。

もう二度とあの惨劇を繰り返さないように。

そう思いながらも街の外に出ようとする。

とりあえずオルクスの大迷宮だ。

そんなことを思っていた時だった

「健斗さん。」

「へっ？」

するとフードを被った女性が俺の方をかけてくる。

うつすらながら綺麗な金髪の髪が見えている。

俺でさえ一瞬声を失ってしまう。それは本来なら絶対にここにはいてはいけない人物だった。

「……っ！ちよつとお前何してんの!!」

さすがの俺も驚きを隠せなかった。

それもそのはずそのフードを被った女性はリリアーナ姫である。

「お母様に健斗さんの待女を任されたんですよ。健斗さんは未だに付き人がいなかったの。で。」

「は?」

「私も健斗さんの旅に同行させてもらえませんか?これからオルクスの大迷宮に向かうんですよね?」

「いや。俺も規模を知らないからいうけど結構難易度高いんじゃないのか?65階層までしか攻略できていないんだろ?」

実際魔法の訓練を見ていたら、正直答えて数千年前よりも明らかに魔法文化が遅れている。正直緑の大坑道でさえ100層。その当時ベヒモスも80層くらいにいる魔物にいたはずだ。

それなのに未だに到達していないということ。この世界は昔の人間よりも弱いということだろう。意図して弱くしたのは分らないが。

「でも健斗さんは向かうんですよね。」

「……まあな。王都に居たつて居心地が悪いしな。雫には悪いけど。てかりリアーナは公務はどうするんだよ。」

「私は休暇をいただいたので。」

「……フットワーク軽すぎないか？てか俺はそもそも。」

「それにお母様からには健斗さんのことは解放者の部分を除き、伝えてあります。神代魔法を所得している可能性が高くなるのなら私も覚えていた方が国のためになりますので。」

ダメだ。こいつ多分どうやってもついてくるつもりだ。

少しため息を吐く。なんとというかこいつ。誰かに似ているんだよなあ。

「……はあ。てか俺頼みじや大迷宮をクリアしても神代魔法は得られないぞ。」

「ええ。それも承知です。それに。私がついて居た方が他の国への入国は楽になると思いますよ。」

確かに利点はそこだ。一応王国の姫という立場で俺は護衛の者といえればかなり入国は楽になるだろう。

しかし面倒ごとも多くありそうなんだよなあ。ぶっちゃけ国に入る時は幻影魔法を使えばいいだけだし。

リスクとリターンを計算する。

……まあ神のことを知った以上連れていった方がいいか

これでリリアーナになんかあつたら俺も後味悪いしな

「分かったよ。とりあえずオルクスまで1日で行くからな。」

「へ？オルクスまでですか？」

「ああ。おぶつて行くけど絶対舌噛むなよ。」

「へ？」

リリアーナを背負うと風魔法で体を空中に浮遊させ飛び出す。

「んじや旅立ちだ!!」

「ちよっ!!」

そして一気に加速し始める。空気中のチリやゴミ、魔物は結界を張っているので体には負担は行かないように調整している。

「す、凄い。こんな魔法見たことないです。そういえば健斗さん。詠唱は？」

「ん？俺詠唱したことないぞ。というより魔力の流れをつかめたら普通の人間でも無詠唱で魔法は使えるはずだからな。」

「ま、魔力の流れですか？」

と不安そうにしているけど実際は一人魔力操作をする人がいれば一週間くらいでできるようになる。

「ああ。後から教えるけど魔力には流れがあるんだ。俺からしたら詠唱や魔法陣は発動のイメージを高める目的って感じの方が強いからな。魔法の改造は地球に転生してからも少しやっていたころ時魔法陣を改良するくらいか？」

魔法の改造と聞きリリアーナは驚いていた。

「魔法っていうのは無駄なところを直したらより威力や性能が高まる。教えられた魔法をどう自分のものにするのかを調べればより改良点が見つかるはずだしな。」

「……解放者ではそういう研究をしてきたんですか？」

「俺はそうだな。でも解放者って結構自由だったぞ。基本的に噂を聞いて人材を集めていたし。」

「自由ですか？」

「元々縛られるのが嫌いな集団だったからな。俺もそうだけでも、自分でやりたいことをやっていたかな。」

自由な暮らしができて。そして個性のあるメンバーだったことはいい思い出だ。

「とりあえず飛ばすぞ。自作の神結晶もあるから魔力の保存はしてあるから。」

「ちよ、今なんて言ったのですか!!」

と言いながらも飛びだっていく健斗にリリアーナはまた驚きの声をあげる。

……世界を変えるため

俺たちは空の旅を楽しんでいた。



## 緑の大坑道

あの空の旅から八日

「っ!!本当にできませんでした!!」

ピョンピョンと嬉しそうにダンジョン内でうさぎのように飛び跳ねるリリイに俺は苦笑してしまう。

ここは99階層のオルクスの大迷宮である。

オルクスの大迷宮に入って一週間。

正直リリイがここまでの戦力だとは思ってもなかった。

恐らくクラススの結界師である谷口よりも優秀であるというのが俺がリリイに関するイメージだった。

しかし、魔力の流れに気づくまで1日もかからなかったことから魔法についてはあまり教えてもらっていないことが分かってる

それが幸いし簡単に魔力操作を覚えることができたのだ。

食費を浮かすために俺は魔物を食べている。

それができるのは実は神水の人工的な開発に成功したからであり、決して自殺とかそ

ういうわけではない。

実はオスカー兄さんと共同制作により神結晶の神水が出るルーツについて研究していたことがあり、その法則は三年かけて見抜いた。

オスカー兄さんが前に魔力を用いて魔力を貯める程度の神結晶を制作していたのだが、実は本当においしいところまで来ていたのである

それは魔力の属性が違ったのである。

魔力を無属性の魔力をためていたため何も反応がなく、正確な属性は自然と水属性の複合である。

それを変成魔法の初級である、魔力挿入が関与している

実は俺は初級くらいの生成魔法と変成魔法は使えるのだ。

兄さんたちをずっと隣にいて、才能があると言われていたのだが。

俺は数十年経った今でも生成魔法と変成魔法の二種類の初級魔法しか使えない。

これが神代魔法の難しさなんだろう。一度見た魔法はすぐに覚えられる俺でさえこれなのだから普通なら適性があっても基本的には数百年単位はかかるのだろう。

今回は神水が目的だったので魔力の変換効率が悪いけど、数年単位の作成時間で、神結晶の特性を変えられるようになることは地球で分かっているしな。

「はいはい。てか本当にいいのか？美味しくないし、最初はかなりつらいぞ。」

というのもリリイも食料に魔物を食べることを言ってきたのだ。一応数十万以上の路銀は持ってきていた。そのほとんどを食料とし、俺が適当に作った装備で満たしたおかげで結構余裕はあるからな

「いえ。さすがに健斗さんが魔物の肉を食べているのに私だけ贅沢して普通の肉を食べているのはちよつと。」

「……そういうもんか？俺は別に気にしないんだけど。」

「私は気にするんですよ。」

首をかしげるとため息を吐くリリイ。

あれから名前も略称に変わり少しだけ距離感は近くなったような気がする

「でも、前世と本当に変わってないんですよね？」

「……ああ。緑の大坑道で間違いないな。65層にミレディ姉さんがオスカー兄さんの自作した神結晶で溜め込んだ魔力をぶち込んだ奈落があったからな。」

「あれ、解放者が開けたんですか!!」

「あん時はここの聖光教会の司教が兄さんの面倒みていた子供に人体実験をしていたからな。教会の戦いの後だよ。」

するとリリイが絶句する。

「司教がですか？」

「元々教会でも地方の神官は神山に向かうためになんでもやるからな。その中に人体実験とか子供を神に差し出したりとかしていたんだよ。元々は俺が教会の人間を殺してきてただけだな。孤児だつて人間だし、いいやつだつて一杯いる。神なんか信用してないやつもあの当時は多かつたな。」

懐かしげに語ると少し興味深そうに聞くリリイに俺は話続ける。いつのまにかリイとの距離は近くなつており、略称で話す仲になつている。

だからふと口をこぼしてしまうのは仕方がないことだろう。

やつぱり人肌が恋しいんだろうか。

元々寂しがり屋な俺にとつてはリリイは何も言わず話を聞いてくれるのでかなりありがたかつた。

「そういえば次100層ですね。オルクスの大迷宮もこれで。」

「いや。まだ続くはずだぞ。」

「へ?」

「ここまでは前座だ。正直俺もレベルが15に上がつて魔力量が二百万オーバーになっているけどここからは微妙なんだよな。」

自分よりも強い相手に対する結界の貼り方についてはリリイには教えてある。受け流しというように実践を踏まえ俺がレクチャーをしていたのだ。

結界魔法。地味に見えるが俺が一番重宝していた魔法である。

この一つで攻撃の誘導ができ、攻撃するルートを狭めることができるのだ。

対人戦でもこれは有効に使い、盗賊の捕縛や色々なことに使える。

さらに結界術の応用で防音部屋を作ることができ密会も可能であり、さらに消費魔力も少ない。

なので便利魔法として俺が好んで使っていた魔法なのだ。

「微妙ってどういうことですか？」

「いや。難易度が桁違いに上がるんだよ。ここが終わったら地上に戻ることができなくなるし。」

「へ？」

「恐らくライセン大峽谷に通じているんだよ。この迷宮。」

「ら、ライセン大峽谷ですか？」

「ああ。迷宮の魔法陣あるだろ？あれ基本的には俺が作った魔法陣だからな。これ俺が聞いた通りに作ってある可能性が高いな」

「へ？」

魔法陣を作った。その一言でリリイが固まる。

「転移の魔法陣。あれは空間魔法のゲートという魔法で空気中の魔力を使っているんだ

よ。自然界にも魔力が存在していてその魔力を使って魔法陣を作成。それを具現化させる。」

「あの、簡単に言っているけどそれかなり凄いことなんですけど。」

「最後の一年は神々との争いもそうだけど未来につながることを考えていたからな。……正直未来が見えていた俺にとってこれは必要なことだったんだよ。」

未来視についてはリリイには話してある。先の未来が見える。これは俺にとってどれだけ残酷なものなのか。

……悔しいけど、あの時神に勝てる可能性はゼロに近かった。

解放者は焦りすぎたのだ。あれだけのメンバーが集まって、多くの時を費やしてそれでも数年で神に挑戦した。

そして結果は敗北だった。

俺は死んで。未来につながることもしかなかった。

未来は変えられる。

だが未来を変えるには大きな努力が必要になる

そのことを怠った俺の責任でもあるのだ。

「……でも凄いなと思います。私たちは普通にしても気づくことはありませんでしたから。」

「気づくも何も普通は気づかないもんだよ。俺は教育も何も受けてこなかったからな。自分が見たものが現実。それを理解していたからこそ教会に対抗できたんだよ。」

リリーの答えに少し苦笑してしまう。

俺はあの時他の兄さんと姉さんを逃がすことくらいしかできなかった。

あの時もつと力があれば。

そう思わずにいられない。

……こんなことを考える俺は未だに子供なんだろうな。

人に大人っぽいつてよく言われるけど本当は凄く子供っぽい正確だと自覚している。

正直答えるなら雫にはちゃんと伝えていくべきだったと思っている。

でも。雫は一緒にいていくと言いつたから。

でも、俺は雫を死なせたくなかったから。

今ついてきたら雫は確実に死ぬだろうから。

こんな形で別れることになった。

お互いに気づいているんだろう。

俺が隠しごとをしていることも。雫が誰が気になっていいのかも。

当たり前だ。あの世界での特別は雫なんだから。

雫にとっての特別は俺と香織なんだから。

「……」

世界を変える。それがどれだけかかるか分からない。でももし世界を変えられたとしたら。

ちよつと自分の気持ちに素直になつてもいいのかな。

もう少しわがままになつてもいいのかな。

「さてと。それじゃあ休憩終わり。次の階層に行こうか。」

「はい!!」

俺は頭の中を切り替えるために一度顔を叩きリリイに話かける。

そして100層時のフロアに着くとそこは俺が知っているフロアではなく何も無い、ただの大きな立方体のワンフロアだけだった。

中央に警戒して進むと急に小さな幾何学模様の魔法陣が現れる。これは中ボスって感じだろうか。

そして見ると小さな小型のワームが大量に現れ周辺を覆い尽くしている

「ああ。こいつか。スーサイドワームだな。」

「スーサイドワームですか?」

「ああ。こいつは自爆してくるワームだよ。最後の忠誠を体内に忍ばせているんだ。」

「……それってまズくないですか?」



冷や汗を垂らすリリイ。でも実際こいつの対処は簡単だ。

「いや。そうでもない。こうすればいいからな。リリイは全力で結界張っておけよ。」

「へ？」

そうやって俺は手を向け魔力を集め、

「着火。」

たった一体に遠くで最初に爆発させる。それと同時に周辺のスーサイドワームに点火し全てのワームが連鎖的に爆発していく。

こいつの対処は結構簡単だこいつの弱点は遠くで爆発させればあとは結界をきちんと貼れば問題はない。

リリイには無駄な詠唱がなくなったおかげでかなり強力な結界が張られている。

俺の理論上無詠唱だと魔力の量が多くなるとか言われているが実は魔力が余分に掛かるのは寧ろ詠唱をした時だ。

無駄な魔力をそのまま放出しているので余計に負担がかかるのだ。

俺はここでリリイが引き返すべきか確かめようとしていた。この先は恐らくより強力な魔物が現れるはず。これくらいの結界がなければ生き残ることはできないだろう。

「……」

一言も話さず真剣に結界を保つリリイに俺は一つ苦笑してしまう。

……大丈夫だな。

結界は途切れるどころかより強力な結界を張り、そして強固なものになっていく。恐らく回復魔法の応用も教えてすぐに吸収したのだろう。

実は回復魔法の応用に相手の魔力や生命力を奪う魔法がある。

これは俺が開発した魔法でリリイに少しその理論を話したことがあったのだが。まさか習得しているとはな。

個人の評価であるならば。リリイもおおよそ天才という域に達している。

スーサイドワームの暴発した魔力の一部を吸い取り、それを結界を張るための魔力にしているのはまさに圧巻というしかなかった。

そして爆発が収まり、そしてリリイが座り込む。

「……お疲れ様。」

俺は笑顔でリリイの頭を軽く叩く。それにジト目で見るリリイ。

「あの健斗さん。」

「ごめん。これ以上リリイを連れていっていいか試したんだよ。この程度防げないときさすがにこの先は厳しいだろうからな。一応結界の準備はしてたし。」

「……はあ。納得はできませんが。それでどうでしょうか?」

「普通に合格だ。さすがに魔力を奪う魔法を自力で習得したのに認めないと非合

理だしな。」

苦笑いしてしまう俺にリリイはホツとしたように少し頬を赤くしながら嬉しそうに笑う。

実はこの層までリリイは健斗におんぶに抱っこでこの層まで来ていたのだ。……その圧倒的な魔法の腕を持つ彼に認められ安心し、どこか嬉しく、そして褒められたことに少し恥ずかしさを覚えていた。

「…健斗さんのおかげです。私に魔法を教えてくださいましたのは健斗さんですから。」

「ん〜そんな大したこと教えてないんだけど。ただ理論を伝えただけだし。」

「健斗さんにとってはそうかもしれないですけど。私にとっては全部大切なものなんですよ。」

そうやって少しむくれるリリイに少し心臓が跳ねる。

少し顔に熱を感じ少し恥ずかしくなる。

とそんなリリイに返事をしようとした時魔法陣が現れる。それは転移の魔法陣。次のエリアに繋がる魔法陣だ。

「……それじゃあ行くのか。」

「はい。」

といい。俺とリリイは一步踏み出す。

まばゆい光に巻き込まれ転移が始まる。そしてその転移先で聞こえてきたものは「うわあああー!!」  
という叫び声だった。

## 地下での遭遇

転移し終わったところで叫び声が聞こえた俺とリリイは気配感知の代わりに当たるサーチという魔法を忘れ急いでその声の元に向かう。

あの声、確か……

「リリイ悪い。」

とリリイを抱え全力の身体強化をした状態で走る。

これは比較的急がないとまずいと思い全速力で

そしてその声の先にはブルブルと蹲った少年らしき姿と大きなニメートルはあるだろう巨躯に白い毛皮。例に漏れず赤黒い線が幾本も体を走っているクマの魔物の姿だった。

「よつと。」

「キャン!!」

クマってキャンって泣くんだなと高速空中蹴りをお見舞いする

一撃でクマを葬ると俺はその人物を見る

「へ?」

するとキョトンとする見たことのある少年は俺の方を見る。

「やっぱりそうか。」

「南雲お前何しているんだ？」

俺は不思議そうに首を傾げる。

「そし南雲は少し首を傾げたあとそして驚いたように俺を見ながら声を出した。」

「えっ？石川くん？それとリリアーナ姫？」

「つて南雲さんその腕は!？」

「えっ？あつ。」

「っ。南雲。」

俺は人口神水を南雲に無理やり飲ませる。急に驚くが液体を飲みめと小さく命令する。

すると怖がっているように見えたのだがコクリと頷き飲み始めると南雲の様子が激

変する

「えっ？なんで。」

傷が塞がれ腕の再生はしないものそれは驚異の回復力を見せる。

「人工的に神水を作ったんだよ。あれは結構簡単に作れるからな。」

「……へ？」

「あの、健斗さん。神水って未だにどういうものか分からないものなんです。」

呆れたようにリリイがそう告げる。

「……やっぱり石川くん。この世界のことについて。」

「ああ知っている。というよりも前世でこの世界に住んでいたんだよ。」

「前世？もしかして転生ってこと？」

「えっ？あつうん。そうだけど。ちよつと南雲そんなに目を輝かせないで。てか転生人って……まあ雫が読んでいた小説に少しあつたから憧れるのか？」

目がキラキラして見つめてくる南雲に俺は少し困ったようにしてしまふ。

「……てか危険か。少しだけ避難するか。」

「そういえば石川くん。ここって。」

「本当のオルクス大迷宮。一層。」

「へっ？」

驚いたようにしている南雲に俺はすぐに壁に手を付ける

錬成を使い地面に穴を開け俺は少し苦笑する

「ほら。入って少し話すぞ。お前がここになんているかも少し聞かせてほしいし。」

「えっ？う、うん。つてそれって錬成だよな？」

「ああ。俺の兄さんから教えてくれたからな。そこらの錬成師に負けてないぞ。」

「……南雲さん。あまり健斗さんに常識を考えていたら頭痛がしますよ。」

「おい。リリイ。どういうことだ。」

少しだけホツとする。

南雲が俺たちのやり取りを見て少し笑っていたからだ。

とりあえず自殺とかの線は消えたかな。

俺は一先ずホツと息を吐いた。

「……つまりその解放者が神を殺して欲しいっていうのがこの迷宮の目的なの？」

とハジメが不安そうに答える。とりあえず俺の前世が何者であったのかとか色々話した結果不安そうに俺を見る

「いや。違う。この迷宮の目的はこの世界の真相を後世に伝えることと、攻略者が自分の意思で物事を判断できるようになることだ。」

「……自分の意思で？」

「ああ。俺たちもさすがに強制して神を殺せって言いたいわけじゃないんだよ。ただ人に流されず自分の意思で行動できるようにしてもらいたいために作りあげたんだ。狂神との戦いで必要になることを訓練させ、神代魔法とその先の魔法を習得させるためでもあるんだけど。」

「その先の魔法？」



「ああ。俺が手に入れようとしているのはその先にある魔法だ。おそらくだけどそれさえあれば雫や香織を日本に返せるからな。」

すると驚く南雲。

「えっと、健斗くんは解放者の一人なんだよね？えっと。神を殺すことよりも先に僕たちを日本に帰らせてくれるの？」

「…巻き込むわけにはいかないだろうが。お前らはこの世界の人間じゃないんだぞ。さすがに自分のわがままでこの世界に居座らせたらダメだろうが。」

さすがに面倒はかけられないしな

「てか南雲は？なんで奈落に？」

「えっと、実は。」

すると南雲が話始めた内容をまとめると

オルクスの大迷宮の演習でこの迷宮に入りそして無事に目的の二十層にたどり着く直前でトラップに巻き込まれ、その先に過去最高到達点のベヒモスと戦闘に巻き込まれる

撤退戦で一人で錬成を使い足止めをしていたらしい。

南雲が何者かの魔法により撤退することに失敗。奈落に落ちたらしい。

「……まあ檜山だろ。」

俺はすぐに結論を出した。さすがに能力を使わずでも分かる。

答えは簡単香織への嫉妬。その一言に尽きる。

「……やっぱりそう思う？」

「あいつお前のことかなり気になっていたからな。ハジメも気づいているだろうけどあいつお前のこと異性として意識してたし。」

「……」

少しだけ残念そうにしている。どこか後悔。懺悔。その感情が一人の少年の今の気持ちを表していた。

「……でも、クラスメイトを殺そうとするなんて。」

「当たり前だ。クラスでも殺したいほど嫌いな人物がいたんだろ。何か最近、南雲が香織が行動してそれを檜山に見られた。それに嫉妬した檜山が南雲を気づかれないように暗殺しようとした。……全く恋愛関係のトラブルは本気で面倒臭いことだよ。」

「……他人事だね。」

「他人事だしな。俺は俺で雫の義妹集団から散々やられていたんだぞ？」

「ああ。目に浮かぶね。」

「雫。面倒見よくて王宮でも光輝さんよりも人気でしたよね？」

「あいつかわいいところあるんだけどなあ。みんなかつこいいというけどあいつはどちら

かという甘えん坊で怖がりな女子って気がするんだけどなあ。」

あいつ俺と似ているんだよなあ。

だからこそつい見過ごせなかったのかもしれない。

雫とは小学校のころから構っていた。

どこか危なげなかったから。

わずかな一言に傷ついているのが分かったから

「……怒っているんだろうな。あいつ。」

「そりや今度会った時頬を思いつきり引っ叩くっていつていたくらいだから。」

「まあ。仕方ないか。今の雫はすぐに死ぬだろうしな。」

「……そんなに厳しいの?ここ。」

「正直南雲のステータスじゃ厳しいな。でも別のアドバンテージは取れるけど。」

「アドバンテージ?」

俺は頷く。

「オルクスの大迷宮は元々鉱山としてより良い鉱石が取れるんだよ。これ鑑定してみろ。」

と俺は二つの鉱石を錬成で切り抜き南雲に見せる。

「えっと。これって何?」

「ああ。タウル鉱石と燃焼石だよ。鑑定技能はまだ持つてないのか。」

と俺は鉱石鑑定で二つの鉱石の説明を見せる。するとそれを見た瞬間ハジメは目を見開き何かを考える。

「この二つを組み合わせることであるものが制作可能になるとは思わないか？」

「……火薬と薬莢。」

するとすぐに出てくるところがすごいところなんだよなあ。

「す、凄いよ!!石川くん。もしかしたらこの世界に銃が作れるかも!!」

「まあ作れるだろうな。それと正直この迷宮は錬成師のための迷宮だし。」

「錬成師のための迷宮ですか？」

「ああ。ここで得られる神代魔法は生成魔法だ。鉱石に魔法やスキルの効果を付与することができるとだよ。」

「っ!!」

リリイはその一言で絶句してしまふ。

「あの、それって。」

「ああ。アーティファクトを作れるってことだ。」

「……そんな無茶苦茶です。」

「神代魔法っていうのはそれだけ頭がおかしい魔法なんだよ。鉱石も豊富でさらに錬成

師にとつたらオルクスの大迷宮は天国みたいなところなんだ。」

実際良い鉱石がゴロゴロ転がっているオルクスの大迷宮。

それなのに生成魔法を手にいれただけでそれはさらに強化される。

「まあとりあえず攻略するしかないだろうな。南雲の背だけじゃ俺の服は少し大きいか。」

「……僕がいうのもなんだけど石川くん落ち着きすぎてない。」

「伊達に一回死んでないからな。」

と言いながらも少し鼻歌まじりにどうしようか考える。

こうして俺たちのオルクスの大迷宮の攻略が今始まろうとしていた。

## 奈落での日常

ここに三日がたち俺たちは洞穴の中で俺が狩った魔物の肉を食べながら過ごしていた。

あれから近くにいた恐らくこの迷宮で一番雑魚の狼を狩り魔物の肉は食べた時リイとハジメはあれから急激に身体中が激痛に襲われた。

というのも魔物の肉は本来なら毒であり身体中の細胞を壊していくのだ

元々魔力操作ができるようになったリイの痛みは1時間ほどで治ったもののハジメはおよそ三時間ほど苦しみ回った。

腕や腹を見ると明らかに筋肉が発達している。実は身長も伸びている。以前のハジメの身長は百六十五センチだったのだが、現在は更に十センチ以上高くなっている。リイも身長や身体的なものは俺も二人に全力で回復魔法をかけていたのと人工神水のせいもあり身長以外には見た目の変化は見られなかった

しかしステータスを見ると一目瞭然だった。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：100

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：300

魔耐：300

技能：錬成・魔力操作・胃酸強化・纏雷・言語理解

リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ 14歳 女 レベル：12

天職：結界師

筋力：250

体力：250

耐性：250

敏捷：180

魔力：820

魔耐：580

技能：結界術適性「+魔力効率上昇」「+発動速度上昇」「+遠隔操作」「+連続発動」・

回復魔法適正「+回復効果上昇」・光属性適性「+障壁適性連動」・魔力操作・胃酸強化・

閃光

魔物を食べるとステータスが上昇し技能が増えたのだ。

よくよく考えると人間の筋肉痛に似た原理ということを思い出す。

……そういえば最初のころは痛みがあったなと思っていったんだが。

そして今は何をしているかというところとハジメの錬成の修行がてら拠点の拡張をしていた

というの強化したステータスを慣れさせるのに時間を費やしているからであり。

一週間くらいしたらまた攻略に戻るといったものであったのだ。

ついでに名前でお互いに健斗、リリイ、ハジメと呼ぶ仲だ。

実はリリイが発言したのだ。俺が飛んでオルクスに向かっていた時にリリイが王女という肩書きのせいで気軽に話せる友達が少なかったらしい。だから名前やあだ名で呼ぶ仲に憧れていたらしい。

だから俺が名前を変え

……そういえばあの変態も同じこと言っていたな。

メルねえをお姉様。俺のことを年下なのにご主人様と読んでいた変態エルフを思い出す。

あの人もある人で憎めない性格だったよな。



そして今日も何事もないと思われたその矢先だった

「へ？健斗くん。こ、これ。」

「ん？つてうわつまじか。」

そこには俺が作った人工的な神結晶ではなく、天然物と思われる神結晶の姿があった  
「本物は俺も初めてみるな。てか綺麗だな。」

「……うん。グラントツ鉱石よりも綺麗かも。」

「俺の簡易型とはやつぱり年季が違うな。まあ、ハジメが持つておけばいいか？もしかしたら錬成で何かできるかもしれないし。」

「えっ？？僕？？」

「ん？いや俺とリリイは回復魔法使えるし。回復面で不安なのはハジメくらいだろう？」

「……うんそうだね。」

回復魔法も最上級魔法を使える二人には魔力回復くらいしか使い道がないのである。

「そういやハジメは錬成以外に魔法覚えるつもりはないのか？俺からしたらあれだけ地球で科学について勉強してきたのに魔法が使えないのは少し違和感あるんだけど。」

「えっと、確か無詠唱の魔法は実際のイメージだよな？」

「そうだな。光とか風とかなら簡単に覚えられそうだと思うんだけど。」

エネルギーの発生や気候のことを勉強している俺にとってもはや今まで以上の魔法

の開発に成功しているのだが。

「……うくん。でも今は錬成を鍛えたいかな？適性がないからそれほど威力のある魔法は使えないし。」

「まあそうなんだけどさ。水とか神水は残しておきたいだろ？さすがに三人分となると魔物を食べる時くらい以外は回復魔法で頼りたいし。地球に戻っても何かと便利だぞ。」

「…地球で魔法を使っていたんだ。」

「地球で魔法を使うとなんでもちよろくなるんだよなあ。運動部に入らないのもそれが理由だし。」

少し苦笑してしまう。体がすでに魔法を使うことで慣れてしまっているのだ。

「……僕だけで健斗くんの自重を止められるかな。」

「……失敬な。」

と地下での生活はむしろ王宮にいるクラスメイトよりも普通に生活している三人の姿があった

# 奈落の少女

50層が過ぎると俺たちはゆっくりとした速さで攻略していた  
 ときあえず今のステータスというところ

石川健斗 17歳 男 レベル：11

天職：先駆者

筋力：2100

体力：2100

耐性：2100

敏捷：2100

魔力：10000000

魔耐：10000000

技能：未来視「+自動発動」「+仮定未来」「+天啓視」・暗殺術・錬成「+鉱物系鑑  
 定」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」「+圧縮  
 錬成」「+高速錬成」「+自動錬成」「+イメージ補強力上昇」「+消費魔力減少」・全魔法  
 適性・複合魔法・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」「+効率上昇V」

「＋魔素吸収」「＋身体強化」「＋部分強化」「＋変換効率上昇Ⅲ」「＋集中強化」・想像構成「＋イメージ補強力上昇」「＋複数同時構成」「＋遅延発動」・天才肌・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・高速魔力回復・言語理解  
自分自身やりすぎた感はある。特に魔力に限ったら制御しているだけなかったらただの化け物だろうし

ついでにハジメたちも最近は一応ステータスを見ていないけどオール1000近くまであがっている

「ハジメでできたか？」

「うん。一応1000発分は用意できたよ。」

「1000発か。まああそこに広間を攻略すればいいと思うしおそらく中ボス戦だろうしな。」

「あの。ということはあるのワームみたいなモンスターがでるのでしょうか？」

「んー。まああれ以上の敵ってことには間違いないと思うけど。てかあの敵結構楽だったじゃん。」

「私死にかけたんですけど。」

と俺はあつけらんかにそう言う少しジト目で睨んでくるリリイ。

「死にかけたってお前もあれ結構余裕だったんだぞ？魔力を吸収している時って魔法の

威力を弱める効果もあるから。」

「へ？そんなんですか？」

「何で使っている本人が知らないんだよ。魔法の魔力を自分に取り込んでいるんだぞ。魔力そのものを取り込めるからな。空気中の魔力の流れが分かるからできる魔法なんだよ。」

「……僕も初級魔法は使えるようになっていいるから説得力が違うね。」

魔法の適正がなくても初級程度の魔法なら使えるようになる。

これは俺の解放者の時の研究した結果である。

魔法部門はすでに健斗の管轄になっている。

「んでこのベタすぎるえつと？」

「サイクロプスだよ。」

「そうそう。んでどうするんだこいつ？」

さつき魔法で瞬殺した魔物を見ながら俺は頭を搔く。

「……私とハジメさんは食べておいた方がいいと思います。健斗さんは成長の痛みがほぼないですが私たちにとっては必要だと思いますので。」

「なるほどな。んじゃ俺はこの中をちよつと見てくるわ。魔石だけもらっていいか？」

脇道の突き当りにある空けた場所には高さ三メートルの装飾された荘厳な両開きの

扉が有り、その扉の脇には二対の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋め込まれるように鎮座していたのだ。

さすがの俺も少し嫌な予感がしたので引き返したのであるがその後ハジメたちと攻略することを決めたのである。

それはもしかしたらオスカー兄さんが残したアーティファクトがある可能性があるからだった。

もしかしたら宝物庫があるかもしれない。

空間魔法との応用でできたとした宝物庫は今の俺たちにはとても欲しいアーティファクトである。

さすがに肉を大量に運んだりはできないし。

そんな期待を胸に血濡れを気にするでもなく二つの拳大の魔石を扉まで持って行き、それを窪みに合わせてみる。

ピツタリとはまり込んだ。直後、魔石から赤黒い魔力光が迸り魔法陣に魔力が注ぎ込まれていく。そして、パキャンという何かが割れるような音が響き、光が収まった。同時に部屋全体に魔力が行き渡っているのか周囲の壁が発光し、久しく見なかつた程の明かりに満たされる。

少しワクワクしながら気分はトレジャーハンターのようにして警戒しながら、そつと

扉を開いた。

扉の奥は光一つなく真つ暗闇で、大きな空間が広がっているようだ

中は、聖教教会の大神殿で見た大理石のように艶やかな石造りで出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かって二列に並んでいた。そして部屋の中央付近に巨大な立方体の石が置かれており、部屋に差し込んだ光に反射して、つるりとした光沢を放っている。

近くで確認しようと扉を大きく開け固定しようとする。いざと言う時、ホラー映画のように、入った途端ボタンと閉められたら困るからだ。

「……………だれ?」

かすれた、弱々しい女の子の声だ。ビクリツとして健斗は慌てて部屋の中央を凝視する。すると、先程の「生えている何か」がユラユラと動き出した。差し込んだ光がその正体を暴く

よく見ると上半身から下と両手を立方体の中に埋めたまま顔だけが出ており、長い金髪が某ホラー映画の女幽霊のように垂れ下がっていた。そして、その髪の隙間から低高度の月を思わせる紅眼の瞳が覗いている。年の頃は十二、三歳くらいだろう。随分やつれているし垂れ下がった髪でわかりづらいが、それでも美しい容姿をしていることがよくわかる。

く  
そしてその女の子を見た俺は一瞬固まったがとあることに気づきその女の子に近づ

く  
「……吸血族か。」

俺はいつでも魔法が放てるようにしながらも少女の元に向かう。

どうやら封印石で覆われている罪人のような姿に俺も少し戸惑ってしまう。

攻略者の仕業か？

いや違う。

恐らく攻略者。魔族の仕業であろう。

というよりも床下にヴァンドゥル兄さんの紋章が書かれてある。

だから一瞬魔族の仕業かと思ってしまうがおそらく吸血族の仕業であり、ここできなければならない理由があったはずだ

「……お前何でこんなところにいるんだ？」

だからつい気になってしまった。

おそらく神関連で何かあったとしか思えないんだけど

半ば呆然としている女の子。

それをただ話し始めるまで俺は待ち続けていると

「私、先祖返りの吸血鬼……すごい力持つてる……だから国の皆のために頑張った。で



も……ある日……家臣の皆……お前はもう必要ないって……おじ様……これからは自分が王だって……私……それでもよかった……でも、私、すごい力あるから危険だって……殺せないから……封印するって……それで、ここに……」

枯れた喉で必死にポツリポツリと語る女の子。なんとまあ波乱万丈な境遇か。しかし、ところどころ気になるワードがあるので、そのことについて尋ねてみる。

「お前、どっかの国の王族だったのか？」

「……（コクコク）」

「殺せないってなんだ？」

「……勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「……再生か。」

「これもだけど……魔力、直接操れる……陣もいらぬ」

「……ああ。そっか。それが普通なのか。」

すでに無詠唱が当たり前になっている俺にとってそれが常識であることを忘れていた。

だが、この女の子のように魔法適性があれば反則的な力を発揮できるのだろう。何せ、周りがチンタラと詠唱やら魔法陣やら準備している間にバカス力魔法を撃てるのだから、正直、勝負にならない。しかも、不死身。おそらく絶対的なものではないだろう

が、それでも勇者すら凌駕しそうなチートである。

それだからこそ選ばれたのだろう。神の器に

「……………たすけて……………」

「……………ちよつと待つてろ。今解析中。」

「へ？」

魔力感知ですでに封印石を捉えている

なるほどな結構強い封印石で覆われているが関係ない

……………んじゃ始めるか

魔力が注ぎ込み始める。それはとても鮮やかで綺麗に結界石を解き明かしていく、

女の子の周りの立方体がドロツと融解したように流れ落ちていき、少しずつ彼女の枷を解いていく。

それなりに膨らんだ胸部が露わになり、次いで腰、両腕、太ももと彼女を包んでいた立方体流れ出す。一糸纏わぬ彼女の裸体はやせ衰えていたが、それでもどこか神秘性を感じさせるほど美しかった。そのまま、体の全てが解き放たれ、女の子は地面にペタリと女の子座りで座り込んだ。どうやら立ち上がる力がないらしい。

俺は目を逸らしながら

「ほれ。大丈夫か？」

「……ありがとう」

「別に攻略のついでだしな。」

予想とは違うがいつか。

俺は少し考え俺の上着を渡す

「とりあえずそれ羽織っておけ。さすがに目に毒だし。」

「……ん。名前何？」

「石川健斗。そっちは？」

健斗。健斗と名前を物々つぶいている。……なんか少し怖いと思ったのはこの女の子には内緒だ

「名前つけて？」

「はっ。」

「もう、前の名前はいらぬ。……健斗の付けた名前がいい」

「……はあ。って言ってもなあ。」

と俺は少し考える。前の自分を捨てて新しい自分と価値観で生きる。女の子は自分の意志で変わりたいらしい。女の子は期待するような目で健斗を見ている。

「……ユエ。」

と俺は頭に浮かんできたその言葉を告げた。

「ユエ?.....ユエ.....ユエ.....」

「ん。確か俺が出会った魔法使いで知っている限り俺以外では一番魔法の扱いがうまかったんだよ。ユエという名前は俺たちの世界では中国語で月と表すからな。」

「俺たち? 健斗以外にも誰かいるの?」

「外で待たせてある。っ!」

するとかすかに殺気を感じ取り上を向く

「.....守護者か。厄介だな。えっと。」

「.....んっ。今日からユエ。ありがとう」

「ああ。まあ雑談する暇はなさそうだな。」

俺はユエを抱き上げそして背中にとその直後直前までいた場所にズドンツと地響きを立てながらソレが姿を現した。

その魔物は体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしやわしやと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。

一番分かりやすいたとえをするならサソリだろう。二本の尻尾は毒持ちと考えた方が賢明だ。明らかに今までの魔物とは一線を画した強者の気配を感じる。

「.....チツ。面倒だけどやるしかないか。」

どうせユエを逃がさないための最後の仕掛け。いや。ユエを守るための最後の仕掛

けだ。

「……誰かは分からないけど引き継がしてもらおう。ユエとりあえずこれ飲んでろ。」  
「ん。」

そして俺はユエを抱えたまんま息を吸いそして決意する

「それじゃあ殺戮を始めようか。奪えるもんがあるんだったら奪ってみろ。」

## VSサソリ

サソリモドキの初手は尻尾の針から噴射された紫色の液体だった。かなりの速度で飛来したそれを躲すと着弾した紫の液体はジュワーという音を立てて瞬く間に床を溶かしていった。溶解液のようだ。

「うげえ。痛そうだな。」

と思いながらも術式を唱え健斗は瞬時に魔法を発動していく。ほとんどノータイムで魔法を操っていて弾幕が広がっている。

背中越しにユエの驚愕が伝わって来た。それを気にせずに魔法を連発している。

しかし結構強く発しているはずだが全く効いたそぶりはない。そして一つだけわかったことがあった

こいつ変成魔法でできた魔物かよ!!

おそらく通常の魔物を強化した魔物であること。またこれをよこしたのがやはり変成魔法しか考えられない。

よく考えたら半分魔物である俺みたいに自我を持つ魔物なんて滅多にいない。

そのことをすっかり忘れてしまっていた。

「ちっ。絶零。」

と唱えた瞬間強烈な冷気がサソリに多い続ける。おそらくシユタル鉱石と呼ばれる。魔力との親和性が高く、魔力を込めた分だけ硬度を増す特殊な鉱石を備えている。

健斗自身久しぶりの強敵相手に心からどう対応すればいいのか考えていた。

近づいたら練成ができるけどその前の溶解液がある。棘もなんか仕掛けがありそうだし魔法で応戦が一番ましか

とりあえず手榴弾を取り出し氷を軸にサソリにぶつけながらしている激しいバトルにユエが聞き出した

「……どうして?」

「あ?」

「どうして逃げないの?」

自分を置いて逃げれば助かるかもしれない、その可能性を理解しているはずだと言外に訴えるユエ。

しかしその回答は簡潔だった。

「助けたいと思ったから助ける。それだけだろ。」

たったシンプルかつ簡潔な答え。

それが健斗の意思だ。

正直隼人自身お人好しの部類に入るって自覚はしている。  
でも

困った人を見過ごすほど腐ってはいない。

困らせることはかなりあるのだけれどそれでも

俺はロック・リエールでもあり石川健斗なのだ。

助けたいものは助ける。

兄さんたちが俺を助けてくれたように。俺を受け入れてくれたように

雫と香織が俺を受け入れてくれたように

リリイやハジメが俺のことを信じてくれるように

隼人は見捨てない

どんなことがあるうとも一度助けるときめたら絶対に助けるのだ

「それにこんな雑魚にやられるほど俺は弱くないからな。」

するとその瞬間光の鎖がサソリに絡みつく

「チエックだな。」

健斗はそう告げるとサソリに向けて手を伸ばす

「ドレイン。」

その言葉で光の鎖から植物が生え、サソリにまとわりつき魔力と生命力を吸収し吸い



取っていく。その養分は健斗に吸収され、疲労が回復していき体が軽くなった気がした。

それと反対にサソリはだんだん弱っていく、そしてついに動かなくなった。

「ミッション完了つと。」

「……」

ユエは驚愕の表情で健斗を見る。

ユエ自身魔法の腕には自信があつたのにそれを圧倒的に上回る魔法の数々。

発動時間もノータイム。魔力操作も自分よりも上手であり、すべてを蹂躪する能力だから気になった。

「……何者?」

ユエからの言葉に健斗は少し笑って自身ありげにこうつぶやいた

「石川健斗。解放者ロック・リエールの生まれかわりであり、この世界の真実を知るものだよ。」

健斗は進む。たとえそれが荊の道であろうとも。

絶対に仇は討ってやるとユエを守った吸血族に誓って。